

# 花だより 鳥だより



ポロト案内舎 2020年 9月 105号

9月は夏と秋が行ったり来たり。汗ばむ陽気が続いた後の冷え込みはこたえます。案内舎の周りのハンノキは、紅葉せずに葉を落とし、いつの間にか冬の装いに姿を変え始めました。小鳥の姿が少なくなり、カモが数を増してきました。



### ポロトのタンチョウ 帰ってきた 246





14日に246のリングナンバーをつけたタンチョウが、1羽でポロト沼にやってきました。昨年、ここで子育てを行ったオスです。春に縄張り争いに敗れ、4月27日を最後に、行方知らずになっていました。

繁殖期を終えた秋に、再びポロト 沼に帰ってきましたが、ここは既に 他のツルの縄張りです。激しい攻撃 にあって姿を消してしまいました。

この246は、以前から左足が少し悪いようでしたが、戻ってきてさらに悪くなっていました。足が大きく曲がっています。飛ぶときは、左足だけ下げています。このハンディキャップのために、縄張り争いに敗れたのかもしれませんね。

秋はタンチョウたちも、越冬地に 向けての移動を始めています。牧草 地でも姿を見かけます。



#### 最後の花たち







9

9月は花の種類がめっきり少なくなります。9月に咲きだす花と言ったら、片手で数えるほどしかありません。その代表が、コハマギクであり、エゾリンドウ、ナギナタコウジュです。

コハマギクは潮風があたる海岸や岬に、へばりつく様に咲いています。強風に耐えるために、背を低くしていますが、体に似合わない大きな花をつけています。その白と黄色の配色は、枯れ草が目立つ海辺で、ひときは輝いています。花粉を運ぶ虫たちに、最後の活力を与えているようです。

エゾリンドウとナギナタコウジュは、コハマギクと違い、庭に咲く身近な花です。エゾリンドウのブルーは草の陰にあっても目を引き付けます。地味なナギナタコウジュは、独特のにおいで、存在感を高めています。それぞれの戦略で、今日まで命をつないできました。



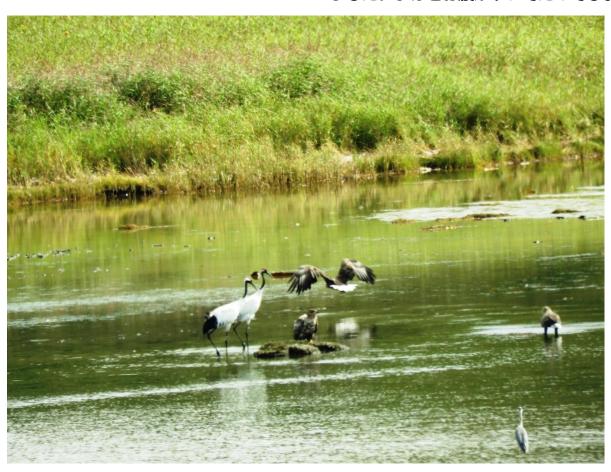
## 地味でも凛々しく





9月のポロト沼は、サケの遡上のピークを迎え、オジロワシがそれを狙って集まって来ます。 そのほとんどが、まだ尾が白くなっていない若鳥です。遠目には、トビとほとんど見分けがつかない体色です。上の写真、4羽のうち,飛んでいるのがトビ、他はオジロワシです。

しかし、近くで見るとそれはワシ。くちばしの先が黒いながらも、キリっとした精悍な表情をしています。ある日、沼の浅瀬に打ちあがったサケを食べる3羽のオジロワシがいました。2羽は成鳥、1羽が若ワシです。タンチョウカップルが、のっしのっしと、威嚇しながら近づくと、成鳥の2羽は警戒して飛び去りましたが、若ワシだけは、サケから離れずその場に踏みとどまっています。さらに、タンチョウが若ワシの周りを歩き続けますが、若ワシは居座り続けました。よほどお腹がすいてたのでしょうね。





#### カモが来ると集まって来ます









この秋も、コガモやオナガガモの群れが渡ってきました。夏の間は、マガモとカワアイサだけの寂しい水面でしたが、渡りのカモたちの到着で、にぎやかになってきました。さらに、ウミネコの若鳥やユリカモメもやってきました。

すると、猛禽類も姿を見せるようになりました。 オオタカの若鳥が、電柱の上にとまって、あたりの 様子に気を配っています。うるさいカラスに見つか らないよう気配を消しながら、獲物の様子をうかが っているようです。

ハヤブサは高速で飛びながら、カモの群れを追い立てます。高空から急降下、水面すれすれを飛び、群れに襲い掛かります。失敗すると、急上昇、次の機会を狙います。曲芸飛行さながらのダイナミックな狩は、いつまで見ていても飽きません。でも、カモは命がけですから、簡単には捕まりません。

さらに、チュウヒも現れました。紙飛行機のように、V字に翼を広げ、ゆっくりと湿原の上を飛び回ります。こちらは省エネ飛行です。主にネズミや小鳥を狙っていますが、チャンスがあればカモも襲いますから油断はできません。

オジロワシも力モを襲います。そればかりではなく、他の猛禽が捕まえた獲物を横取りするのが得意です。オジロワシが集まるポロト沼での狩りは、捕らえた獲物をいかにワシから奪われないようにするかがポイントです。オオタカやチュウヒは、葦の茂みに飛び込んで隠れます。ハヤブサは獲物を掴んだまま、高速で飛び去り、ワシの追撃をかわします。

秋のポロト沼では、命を懸けたドラマが日々刻々 と繰り広げられています。